



Title	古儀式派と異教信仰：ヴィグ共同体の墓標をめぐって
Author(s)	宮崎, 衣澄
Citation	大阪大学言語文化学. 2001, 10, p. 103-113
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77998
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

古儀式派と異教信仰

—ヴィグ共同体の墓標をめぐる— *

宮崎 衣澄 **

Благодаря усилившемуся в последнее время интересу к религии в России активно проводятся исследования, касающиеся старообрядчества. Старообрядцами в России называли христиан, отказывавшихся принять реформу православного канона, проведенную в 1654 г. патриархом Никоном. В результате многолетних преследований и гонений последователи старообрядчества, желая сберечь свои традиции, стали вести очень уединенный образ жизни, практически не поддерживая связей с внешним миром.

До сих пор существует не мало неясных моментов относительно уклада жизни и быта внутри старообрядческих общин. В данном исследовании предпринята попытка на основе анализа характерных особенностей надгробных плит и крестов в старообрядческих поселениях северных районов России сделать вывод о связи старообрядчества и язычества.

На севере России в районе, где прежде располагалось старообрядческое поселение Выговская община, были обнаружены останки кладбища. Внимание российских исследователей привлёк тот факт, что могилы старообрядцев были украшены надгробными домиками и надгробничками. Исследования показали, что традиция украшать могилы подобным образом сохранялась у староверов северных районов России вплоть до 20 века. В других районах на могилах обычно клали надгробные плиты и ставили кресты, аналогичные современным. Интересен также тот факт, что истоки надгробий подобного рода восходят к временам языческой, до христианской Руси. Вместе с тем в надгробиях использовались и

* Старообрядчество и язычество (Идзуми Миядзаки)

** 大阪大学言語文化研究科博士後期課程

традиционные элементы христианства, такие как икона и крест. Таким образом, в убранстве старообрядческих могил тесным образом переплелись старые языческие традиции и неотъемлемые элементы христианства. Несомненно, главной целью старообрядческих общин было сохранение в неизменном виде традиций и канона русского дореформенного православия. Вместе с тем, нельзя отрицать тот факт, что старообрядческие поселения одновременно являлись хранителями древнерусского язычества.

1 はじめに

古儀式派とは、1654年ロシア正教総主教ニーコン（1605-81）が行った典礼の改革に反対し、それまでの典礼方法を守り続けることを主張したロシア正教会の一派である。ニーコンは、ロシア各地での典礼書や儀式の不一致、翻訳の誤りから生じた他の正教会との差異を解消するために、皇帝の信任を得てロシア正教の儀式をギリシア風に改訂した。具体的には、それまで二本指で切っていた十字架を三本指に替えること、キリストの綴りを *исус* から *иисус* に改めること、八端の十字架から主に四端の十字架を用いることなどであった。農民を中心に多くの民衆がこの改革を総主教独裁体制の強化、ロシアの急激な西欧化とみなして反発し、古儀式派を支持したと考えられている。しかし、ニーコンがこの改革に従わない信者をすべて破門にして厳しい迫害を加えたため、古儀式派信徒は権力の手の及ばない深い森の中に逃れたり、自殺を図ったりした。

近年、ロシアにおいて宗教に対する関心が高まる中で、古儀式派についての研究も活発化しつつある。しかし長年にわたる迫害の結果、古儀式派信徒は自らの信仰を隠し、外部の者との接触をさける傾向にあることから、共同体内の生活や実態など未だ明らかにされていない部分が多い。

本論文は、ロシア北方地方の古儀式派共同体、ヴィグ共同体周辺で制作された墓標をとりあげ、そこにみられる異教信仰との関わりを分析することによって、古儀式派共同体の実情の一端を明らかにしようとするものである。

2 ヴィグ共同体の概要と研究史

2.1 ヴィグ共同体の概要¹⁾

まずはじめに、今回とりあげるヴィグ共同体について簡単に触れたい。ヴィグ共同体はニーコンの改革に反対して立てこもりを続けていたソロヴェツキー修道院陥落後の

1694年、シュニガーの輔祭ダニール・ヴィクリチ、アンドレイ・デニースフらが中心となって、白海沿岸地方（ポモーリエ）のヴィグ川流域に設立された。無司祭派に属し²⁾、修道院の形式をとり、共同体設立当初は結婚が許されていなかった。設立当初は40人ほどであった同共同体の人数も、ロシア各地から安住の地を求める古儀式派信者が集まって、わずか4年後には2000人に達し、無司祭派の最大拠点の一つとなった。また同共同体は文化面でも他の古儀式派共同体に類をみない繁栄を誇った。共同体には早くから聖書の写本に従事する工房が存在し、読み書きを教える学校や、ニーコンの改革以前の写本や様々な本を集めた図書館が設けられ、高い識字率を誇った。また高度な芸術性を有するアイコンや写本、銅製の十字架や折りたたみ式アイコン、手書きのルボーク、木彫りのアイコンなどが独自のスタイルで制作された。同共同体はニコライ一世からアレクサンドル二世へと受け継がれた厳しい古儀式派弾圧のなかで1857年に強制的に閉鎖されるまで、約150年に渡って存在し続けた。

古儀式派迫害の中、ヴィグ共同体がこのような強固な共同体に発展したのは、二代目共同体長アンドレイ・デニースフの力量によるところが大きい。彼は当初より課題であった食料不足を解消するためにカルゴポリに土地を購入し農業を進める一方、白海の漁業を活発化させた。文化面においてはロシア各地に共同体作品の販売と写本の収集のための拠点を設けた³⁾。また国家権力と折り合いをつけることにも力を注ぎ、ピョートル大帝が北方戦争のためにオロネツにたてた鉄工場と同共同体員が働く見返りとして、古儀式派信仰を容認させ、共同体存続のために、歴代皇帝に貢物もした。しかし、なんと言っても彼の功績は、それまで教養の低い人が信仰しているとされていた古儀式派信仰に、神学的な根拠を与えたことにある。1722年、シノド（宗務院）がヴィグ共同体の指導者と宗教問答で対決するために、ヴィグ共同体に古儀式派のドグマと儀式に関する106の質問を送りつけたのに対し、デニースフが中心になって『ポモーリエの返答』（Поморский ответ）を執筆して回答した。彼らは教会権力を否定し、古来の正しいキリスト教を守っているのは古儀式派であるということを、豊富な知識をもって証明した。この『ポモーリエの返答』は、ヴィグ共同体のみならず、その後多くの古儀式派信者にとって神学的基盤となった。

¹⁾ この節はЮхименко Е. М. Строгобрядческая столица на севере России. // Неизвестная Россия. Каталог выставки. ГИМ. М., 1994 を主に参照した。

²⁾ 無司祭派はニーコンの改革以後に叙任された司祭を認めず、教会の位階制度一般を否定した。一方、容司祭派は、改革後の司祭も認め、国家教会側から破門にされた司祭を受け入れることもあった。

³⁾ ヴィグ共同体の拠点は、ベトロザヴォーツク、ペテルブルグ、モスクワなどの都市部にもあり、ニジニ・ノヴゴロドといった他の古儀式派共同体との連絡も密であった。また、写本を集めてシベリアまで行ったという。

2.2 研究史

ヴィグ共同体の歴史に関する研究においては、実際に共同体のメンバーであったイヴァン・フィリポフの『古儀式派ヴィグ共同体の歴史』⁴⁾に端を発し、Д.オストロフスキー⁵⁾やП.Г.リュボミーロフ⁶⁾らの概括的な研究があげられる。同共同体の研究はロシア国外でも活発に行われ、R.クラメイの『古儀式派信者とアンチキリストの世界』⁷⁾が知られている。またE.M.ユヒメンコが近年発見された古文書の資料をもとに新たな事実を積極的に発表している⁸⁾。

ヴィグ共同体の文化面に初めて注目したのはB.Г.ドゥルジーニン⁹⁾で、彼はアイコンや写本等ヴィグ共同体で制作された作品に高い芸術性を認めている。近年では同共同体の写本や文学について同上のユヒメンコの研究が知られており、その他イトキナ¹⁰⁾が独自の文化である手書きのルボークについて、ヴィノクーロヴァ¹¹⁾が鑄銅アイコンについて論文を発表している。

しかし古儀式派の墓標については、これまで建築史についての著書で紹介される程度であった。近年になってB.П.オルフィンスキー¹²⁾とП.П.メドヴェデフ¹³⁾がカレリア人の信仰との関わりでロシア北方地方の墓地についての研究を行っているが、古儀式派の墓地に焦点をあてた研究は未だほとんどなされていない。埋葬儀式や墓標は、一般に保守性が高く時代による変化を受けにくい分野の一つであろう。従って墓地に注目することによって古儀式派の伝統や習慣の一端が明らかになることが期待される。そこで本論文ではヴィグ共同体の墓地に注目し、異教信仰とキリスト教が与えた影響について検討する。

⁴⁾ Филипов И. История Выговской старообрядческой пустыни. В кн.: Островский Д. Выговская пустынь и ее значение в истории Старообрядческого раскола. Петрозаводск, 1914.

⁵⁾ Островский Д. Указ. соч.

⁶⁾ Любомиров П. Г. Выговское общежитие. М., 1924.

⁷⁾ Crummy R. Old Believers and The World of Antichrist, University of Wisconsin Press, 1970.

⁸⁾ Юхименко Е. М. Выговская старообрядческая пустынь. Литература и духовная жизнь. Диссертация на соискание ученой степени доктора филологических наук. Институт русской литературы. СПб., 1994.

⁹⁾ Дружинин В. Г. К истории крестьянского искусства XVIII—XIX веков в Олонецкой губернии. // Известия Академии Наук СССР. 1926.

¹⁰⁾ Итокина Е. И. Русский рисованный лубок конца XVIII начала XX века. М., 1992. など

¹¹⁾ Винокува Э. П. О художественном наследии Выг-Лексинской старообрядческой пустыни. // Старообрядчество в России (XVII-XVIII вв.) М., 1994.

¹²⁾ Орфинский В. П. Некрокультовые сооружения российского севера в контексте христианско-языческого синкретизма. // Народное зодчество. Петрозаводск, 1994.

¹³⁾ Медведев П. П. Некрокультовые сооружения Беломорского Поморья. // Народное зодчество. Петрозаводск, 1994.

3 墓標

現在ヴィグ共同体の跡地にはなにも残されていないため、写真と文献による資料に頼らざるを得ない。自身古儀式派信徒で、古儀式派の美術蒐集家であったФ.А.カリーキンがその跡地で撮影した写真には大型墓上の家(намогильные домики)(図2参照)と柱型墓標(намогильнички)(図1)が写っている。ヴィグ共同体周辺以外の地域では現在の墓地でみられるようなプレート型や十字架型の墓標が一般的になる中で、この様な墓上の家や柱型墓標が同共同体を中心とする古儀式派の墓地でのみ20世紀初頭まで存在していたことは興味深い事実である¹⁴⁾。本章では、これらの墓標について諸古文書館、美術館における調査¹⁵⁾により得られた結果に基づいて詳細に分析したい。



図版1 柱型墓標
Ф. カリーキン撮影
1910年ダニーロフ修道院跡

3.1 墓標の概要

М.В.クラソフスキーは、ロシア北方地方で制作された木造の墓標を三種類に分類している¹⁶⁾。すなわち大型墓上の家と小型墓上の家、そして柱型墓標である。本論文ではまず、筆者が各古文書館で調査した81枚、201点の墓標について、М.В.クラソフスキーの分類を用いてその特徴を概観しておきたい。



図版2 大型墓上の家
Ф. カリーキン撮影
1916年オロネツ県ボヴェネツ郡

はじめに大型墓上の家は、調査した中では最も少ない3点のみであった。ロシア北方の農家のような木造の建物で、壁は丸太を使用した場合と角材の場合がある。個人用の墓と考えるには大型であることから、このタイプの墓標はある共同体や家族といった複数の人のために建てられたと考えられている(図2参照)。必ず、内部に出入りすることができるよう扉がついている。内部の壁には棚が設けられ、イコンや十字架が並べられている。さらに、訪問者用にベンチが置かれている。

¹⁴⁾ Маковецкий И. В. Памятники народного зодчества русского севера. М., 1995. С. 23.

¹⁵⁾ カレリア共和国写真古文書館、サンクト・ペテルブルグ科学アカデミー古文書館、サンクト・ペテルブルグ民族博物館内写真古文書室の資料を調査の対象とした。

¹⁶⁾ Красовский М. В. Курс истории русской архитектуры. Петроград, 1990. С. 124.

次に小型墓上の家だが、大型墓上の家を小型化したもので、壁など建物の構造は類似



図版 3 古儀式派の墓地
И. ムロー撮影
1935 年ケミ共和国

している¹⁷⁾。現在筆者は 47 点を確認しており、後述する柱型墓標と同一の墓地内に存在する場合もある。このタイプは前述のものに比べて小型であるため、個人用に設計されたと考えられる。家の形は直方体状、屋根つき、二階建ての形などがあり、多種多様である。また家には十字架が併設される場合が多く、十字架の形状も多様である。そしてしばしば

前面の壁に小さな正方形、もしくは長方形の穴がある（図 3 参照）。

最後に柱型墓標に関しては、最も多い 151 点を確認している。形状は小型墓上の家に併設する十字架と形状が似ており、柱の上部に屋根がついているものが多く、柱に設置されている十字架や木彫りのアイコンを雨や雪から守る役割を担っている。屋根の下に木彫りの十字架が付いている墓標が 118 点、ついていないものが 33 点確認された。柱の形状は主に丸太状のものと（図 4、左）、平板状のもの（図 4、右）に分類される。調査



図版 4 柱型墓標
マカリエフ撮影
1926 年ケミ共和国

した柱型墓標では、柱が丸太状の墓標は装飾やつくりが簡素な場合が多く、一方平板状の墓標は装飾が非常に繊細である。また、同一の墓地内に丸太状の墓標と平板状の墓標が混在している例もあり、丸太状墓標と平板状墓標の制作された地域が異なるとは考えにくい。そのうち十字架の形が特別なもの、すなわち十字架のすべての端が半円状になっている例が 9 点ある。小型墓上の家に設置される十字架にも、1 例ではあるがこの十字架が用いられている。

以上であげたように、形も大きさも多様な墓標が調査を通して確認されている。そしてこれらの墓標は、保存されている場所のみならず墓標自体が非常に興味深い。というのも、それぞれの墓標にキリスト教の要素と、ロシアがキ

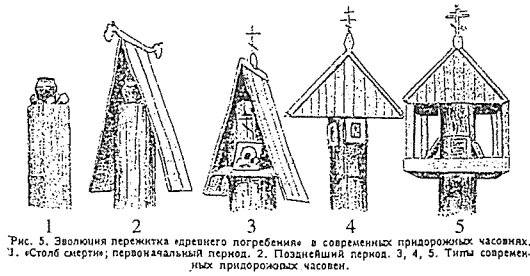
¹⁷⁾ 建築史家メドヴェデフは 1979-1993 年にロシア北方の白海沿岸地方を調査し、143 の墓地から 1907 の墓標を分析した結果、この小型墓上の家について詳細に述べている。彼によると、壁に丸太を使用した墓の家は比較的初期のもので、時代が下ると角材を用いるようになったという。（Медведев П. П. Указ. соч. С. 90.）

リスト教を受洗する以前の自然信仰や祖先信仰といった、異教信仰の要素が混在しているからである。一見ヴィグ共同体と最も相容れないように思われる異教信仰の影響がヴィグ共同体の墓標にみられることは、注目すべき事実であろう。

次に各墓標の異教信仰の要素と、その後のキリスト教化の影響について焦点をしばって検討をすすめる。

3.2 墓標の異教的要素

まず大型墓上の家に関してであるが、この墓標はロシアのキリスト教受洗以前から存在していた。故人を雨や雪、動物から守るという役割に加えて、故人が死後に生活する場所が必要であるとの考えから、魂が落ち着くための場所として家の形をした墓標が建てられた¹⁸⁾。考古学調査では、墓の周囲に犬や鳥といった動物の骨が埋められた穴が見つかっており、いけにえの儀式が行われていたことが明らかになっている¹⁹⁾。そして近年まで故人の肉親や子孫が食料や飲み物をもって墓地を訪れ、故人と共に食事をする伝統が残っていたとい



図版5 柱型墓標の変遷（Фрейман. Н. Придорожная часовня-пережиток древнего “погребения на столбах на путях.” より）

う²⁰⁾。小型墓上の家の例ではあるが、В.П.オルフィнскийは墓地で食事がしやすいように、墓標の家の形が工夫された例をあげている²¹⁾。

次に小型墓上の家は、ほとんどの場合家の壁の前面に穴があげられていることは前章で述べた。この穴は、故人の魂が自由に家を出入りするための窓として作られたという²²⁾。さらに、窓が向いている方角の違いに注目し、В.П.オルフィнскийはカレリア

¹⁸⁾ このように、故人の魂が死後に安息できる場所が必要であると考え、家と同じような形の墓標を作るという習慣は、ロシアのみならず、ヨーロッパ諸国にも存在していたという。また、骨壺の形が家屋や人間の形である場合もあった。（Е. Панофスキー著、若桑みどり・森田義之・森雅彦訳『墓の彫刻』哲学書房1996年、p.10）

¹⁹⁾ Фролов А. А. Пережитки язычества в древнерусской погребальной обрядности. // Древняя Русь. М., 1997. С. 285.

²⁰⁾ 墓の食事で使った食器を墓で割るという習慣もあったという。これは、故人と生きている者の世界とのつながりを遮断するための象徴的な儀式であったという。ここから、故人が寂しがらないように墓を訪問する一方で、故人から悪影響を受けることを恐れる様子が窺い知れる。（Фролов А. А. Указ. соч. С. 286.）

²¹⁾ Орфинский В. П. Указ. соч. С. 60.

²²⁾ 人間の肉体と魂を切り離して考え、死後つまり肉体が減じた後も魂はさまよい続けるとし、魂が出入りのための扉がつけられた棺を、エジプト王の墓にもみることができる。（Е. Панофスキー...p.14）

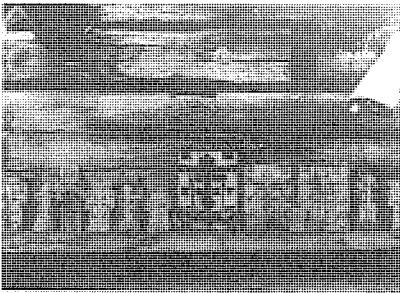
地方の太陽信仰の関与を示唆している²³⁾。

最後に柱型墓標は、H.フレイマンは柱型墓標の起源が異教信仰時代の、祖先信仰にあると指摘している²⁴⁾。古代ルーシでは、自らの氏族や集落を祖先に守ってもらうために、柱の上部に火葬に付した先祖の骨を入れた容器を据え付けて、村の入り口や交差点におくという慣わしがあった。これがルーシのキリスト教受洗後、外観をキリスト教風に変化させる過程においてアイコンに先祖の骨がとってかわったという（図5参照）。ほかにもメドヴェデフが柱型墓標とカレリア人の自然崇拝との関連や、サアミ人の埋葬儀式との関連を指摘している²⁵⁾。

つまり、三種類ある墓標のすべてが異教信仰にその起源をもっていることが分かる。また、これらの墓標周辺では近年まで異教信仰時代の伝統や習慣が特に長く保存されていた。そして異教信仰時代に制作されていたこれらの墓標は、ロシアのキリスト教受洗後も受け継がれ、次第にキリスト教の思想が反映された墓標へと変化していった。そこで本章では墓標のキリスト教化による変化を分析することにより、ヴィグ共同体の宗教意識について考察する。

3.3 墓標のキリスト教化による影響：墓碑アイコンと小型墓上の家

大型墓上の家の内部に設けられた棚に木彫りのアイコンが並べられ、その一部は十字架の形をしていることは先に述べた（図6参照）。この木彫りのアイコン（резные иконы）



図版6 大型墓上の家の内部
Ф. カリーキン撮影
1913年オロネツ県ボヴェネツ郡

は柱型墓標にも数多く設置されていて墓碑アイコン（намогильные доски；訳「墓上の板」）とも呼ばれる²⁶⁾。この墓碑アイコンも墓標と同様、ロシア北方の古儀式派共同体のみで大量に制作されたものである。まずアイコンの構図に注目したい。墓碑アイコンの構図はほぼ一定で、八端の十字架、ゴルゴダの丘、その中にアダムの子、脇に槍と杖が描かれる。そして「誉れ高き王 イエスキリスト 神の子」（Царь Славы ИС ХС

²³⁾ Орфинский В. П. Указ. соч. С. 67.

²⁴⁾ Фрейман Н. Придорожная часовня-пережиток древнего "погребения на столбах на путях." // Советская этнография. Т. 3. С. 90.

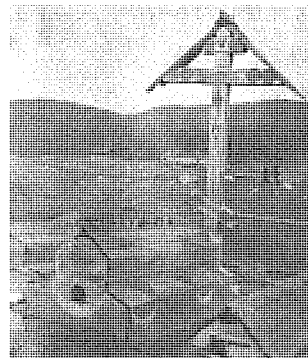
²⁵⁾ Медведев П. П. Намогильные памятники поморов и их связь с традициями старообрядчества. // Выговская поморская пустынь и ее значение в истории русской культуры. Петрозаводск, 1994.

²⁶⁾ 墓碑アイコンについては宮崎衣澄「古儀式派の墓碑アイコンをめぐって」（大阪大学大学院修士学位（言語文化学）論文、平成12年）参照。

Сынъ Божій)²⁷⁾ の文字が独特の略語で十字架の横木やその周囲に配置され、ゴルゴダの丘 (гора Голгофа) はその頭文字 ГГ、アダムの頭 (голова Адама) は ГА、さらにされこうべの場所 (место лобное рай быть) の МЛРБ、ギリシア語で勝利を意味する Ника、槍と杖 (копье трость) は КТ と略される。槍は、ヨハネの福音書で、キリストが磔刑に処せられた後兵士の一人がイエスの脇腹を刺した槍を象徴し、杖は海綿に酸い葡萄酒を含ませてキリストに飲ませようとした棒を表している。このようにイコンの基本的な構図は一定で、筆者が各美術館で調査した墓碑イコン約 280 点のすべてにほぼ共通している。つまりこれらのイコンはキリスト磔刑をシンボル化したある型に基づいて制作されたものと考えられよう。ではなぜ古儀式派共同体でキリスト磔刑を描いたイコンが大量に制作されたのだろうか。おそらくそれは古儀式派信徒が負った数々の困難によるものだろう。古儀式派信徒はニーコン以前のロシア正教を信仰しているために現世では様々な迫害にあい、自らの信仰を守り続けるためには多大な苦しみを負わねばならなかった。そのため彼らは自らの困難な境遇をキリストのそれと重ね合わせて、現世での迫害を真のキリスト教徒たるための試練と考えていたのではないか。

また、キリスト磔刑はキリストの受難と共に復活のシンボルでもある。この復活と関連して古儀式派信徒の間には黙示録の思想が深く浸透していたことが思い起こされる。当時総主教ニーコンによってビザンチンから脈々と受け継がれてきた正教の伝統が突然改革され、さらにピョートル大帝が生活全般にわたって急速に西欧化策を押し進めたために、ピョートル大帝をアンチキリストとみなしこの世の終わりは近いとする考えが特に古儀式派信徒の間に広まっていた。そのため古儀式派信徒は焼身自殺をすることに恐れを抱けなかった。無司祭派の一部が結婚を認めなかったのも、終末が近いから子孫を残す必要がないと考えたからであろう。つまり、古儀式派信徒は現世の苦難のために真のキリスト教世界で復活することを願う気持ちが強かったと考えられる。十字架のイコンにはこのような復活への願望を込めているのではないだろうか。またこれらのイコンは墓碑用に制作されたものであり、故人の復活が切なる願いとして込められていることは想像に難くない。

その他キリスト教の影響がみられる例としては、小型墓上の家における家の形が興味深い。大型墓上の家のように普通の家を縮小した形に加えて、二階建ての家の形



図版7 小型墓上の家
Д. Н. ソロヴヨフ撮影
1911年アルハンゲリスク県

²⁷⁾ Царь Славыの代わりに І НЦ І と書いてある例もある。

をしたものがあり、前面からみると上部の十字架とあわせて、ゴルゴダの丘に十字架が立っているように見える²⁸⁾ (図7参照)。家の形がゴルゴダの丘に似ている例としては、木を組み合わせてなだらかな半円を描いているものもあり、これも丘に見せるために作られたのではないかと思われる²⁹⁾。残念ながら調査した墓標の制作年代が不明であるために、小型墓上の家の時代ごとの変遷をたどることは困難である。しかし、元来大型墓上の家と同様に家をかたどって作られていた墓標が、キリスト教の影響が強まるに従って一部がゴルゴダの丘へと考え替えられた可能性が指摘できよう。

これに加えて柱型墓標は、土着の農民文化の影響も受けていると思われる。墓標に施された装飾は、ロシア北方地方の農家の装飾と非常によく似ている。平板の柱型墓標は、屋根や柱に太陽や花をモチーフにした飾りが時に彩色されて施されており、これらのモチーフや屋根の先端部の飾りは、ロシア北方地方の農家の屋根にある装飾に酷似している。そして丸太状の柱型墓標は柱に深く入った彫りこみに幾何学的な装飾が施されており、やはりロシア北方の農家で柱の装飾で使われているものと非常に似通っている。このように、柱型墓標はキリスト教による影響に加えて、ロシア北方独特の農民文化の特徴も色濃く止めているのである。

以上のように異教時代に制作されていた各墓標は、キリスト教化に伴って異教信仰とキリスト教の要素が混在する結果となった。新しい宗教を受け入れる際に、古代から伝わる宗教と融合し、代替する過程はロシアのみならず世界各地でみられる現象である。しかし、ここで注目すべきは、墓標が都市部を中心に現在の墓地でみられるような十字架やプレート状の墓標へと移行していく中で、ヴィグ共同体周辺のみで近年まで墓上の家や柱型墓標が保存されていたことにある。古儀式派信者が真のロシア正教の伝統として保存したものが、実は異教信仰の伝統をも継承する結果となったことは非常に興味深いことである。

4 結語

以上古儀式派ヴィグ共同体の墓標を分析した結果、次のようなことが分かった。大型

28) モスクワ郊外にあるボゴヤブレーニエ (神現) 修道院の13-17世紀の墓地跡から発見された石碑を、その上部にとりつけられた十字架とあわせて考慮して、ゴルゴダの丘に十字架が立っているとする説は、ベリヤーエフが提示している (Беляев Л. А. Иерусалимские мотивы в надгробиях средневековой Москвы. // Иерусалим в русской литературе. М., 1994. С. 149.)。これに対して、オルフィンスキーは今回とりあげた小型墓上の家と、聖堂徒の類似を指摘している (Орфинский В. П. Указ. соч. С. 61.)。筆者はベリヤーエフの説を支持し、小型墓上の家はゴルゴダの丘を想定して制作された可能性が高いと考える。

29) ゴルゴダの丘の形は、普通キリストの磔刑を描いたアイコンでは三段の階段状に描かれるが、古儀式派の墓碑アイコンでは半円状のゴルゴダの丘も見られる。

墓上の家と柱型墓標にある墓碑イコンの構図はほぼすべて十字架を表しており、終末思想の影響から同共同体には復活に対する願望が特に強かったと推測される。また、柱型墓標にロシア北方地方の農家で施される装飾が残っており、同共同体はこの地方の農民文化も吸収していたことを伺い知る事が出来る。

古儀式派共同体の、文化・芸術面についてはいまだ研究の余地が多く残されている。古儀式派墓地に関する本調査が、古儀式派文化面での研究の一助となれば幸いである。